

満州の思い出

千葉県 高橋 大

一 はじめに

私、高橋大は、昭和十三（一九三八）年にハルビンで生まれた。以来昭和二十一年、八歳のときに日本に引き揚げるまで満州にいたので、満州での生活は八年間であった。八歳といえは小学校の三年生だから、相当に物心もついでいて、いろいろな思い出もあるはずとは思ふのだが、生来ぼうつとした性格だったせい、か、はっきりとした思い出というものがない。鮮明に思い出すこともあるが、それも数が少なく断片的なことだけで、前後の脈絡がつかない。

そこで、平成六（一九九四）年八月に八十四歳で亡くなった、私の母が書き残したメモを頼りに、母が体験した満州での思い出に、幼かった私の記憶に残っていることを交えて書いてみたいと思う。

二 両親の最初の地、北鎮県

私の父は満州国官吏で、協和会の会務職員であった。錦州省北鎮県を皮切りに、新京（長春）、奉天（瀋陽）、ハルビン、そして佳木斯ジャムスなど満州各地で勤務していた。父の最初の任地は北鎮県であるが、結婚してすぐの赴任地であったので、母にとっても最初の満州での生活地であった。この地について母は次のようにメモに記している。

「錦州は、北京と奉天を結ぶ奉山線沿線の最大の街であり、満州と中国の国境、山海関に近かった。北鎮県は、奉天と錦州のほぼ真ん中の大虎山駅から、車で約四時間ほど西に行った山麓の、静かな所であった。

駅から北鎮県まで行くには、背が高くのびた高粱コリアン畑が続く一本道を突っ走るのだが、そこには往々にして匪賊が潜んでいて、日本人と見ると襲撃してくる危険性があつた。そのため、私たちの乗った車は、前後を関東軍の装甲車に守られて走るといふ、物々しい警備体制のもとで北鎮県に向かった。装甲車に守られていたおかげで、匪賊に襲われることも無く、れんが造

りの城壁に囲まれた北鎮県城に着き、私たちはこの県城内で満州生活の第一歩を開始した。

県城内には、日本人、朝鮮人、中国人などいろいろな民族の人々が住んでいたが、日本人の女性は私一人だけで、珍しがられていた。気候は割合に温暖で、ナシ、ブドウ、ナツメなどの果物がたくさん収穫されていて、城内の朝市などで買うことができた。ナシの花の咲くころは、見事で広いナシ畑は一面に真っ白になり、本当にきれいな眺めであった。日本の内地では見られない景色である。

県城の南西方向に小高い丘があったが、そこに北鎮廟という有名な廟があった。廟の敷地に、白い美しい姿の双塔が立っていたが、この白い双塔はかなり遠くからでも眺めることができた。この周辺を通るたびに北鎮廟をすぐに見付けて、家に帰ってきたという安心感を与えてくれたものだった。

縁というか、私は引揚げの貨物列車の上からこの双塔を再び眺めて、ああ北鎮廟だと思ひ感無量なものになった」と、当時の北鎮県城内の様子を書いている。

また、毎日の生活のことや、街中の様子については、「城内の西南部に教会堂があった。金色の十字架が青空にきらめいていて美しかった。聞くところでは、神父様はイギリス人で、布教のほかに中国人の子供たちに英語を教えたり、近隣近在の住民に対して治療にも携わっているということだった。なかなか評判の良い神父様だったが、日本人に対しては多少一線を画していたようだった。私も一度神父様に会って話をしてみたいと思っていたが、何となく気後れがしてとうとう会わずじまいであった。今でもちよつと後悔している。私には、金色にきらめいていた十字架が、本当に平和の象徴のように思えたのです。今でもあの金色に輝いていた十字架の様子を思い出す」と書いている。

また、「参事官付きのボーイであった李青年は、年は確か十八歳だったが、色は浅黒く丸顔で、いかにも人なつっこかった。人柄は非常に誠実で、金銭的にも一度の間違いも起こさなかったし、約束した時間を間違えるようなこともなかった。洗濯、掃除、料理と忙

しく立ち働いていた。珍しいお菓子などを少しだけ分けてあげると、必ず紙にくるんで持って帰り、自分の家族と一緒に食べるといふ優しい心も持っていた。

彼は、上着のポケットにいつも小さな本を入れていた。ある日、私が『それは何の本か?』と聞いたら、恥ずかしそうに取り出して見せてくれたが、それは中国語に訳された、『新約聖書マタイ伝』であった。彼は、あのイギリス人神父の教会に行っているとのことであった。そこで神父様に習っていたのであろうが、英語も少しであったが話せた」ということであった。

父の北鎮県での勤務は、わずか八カ月という短い期間で終わり、次いで新京に転勤になった。李青年は、私たち一家が出発するときには駅まで見送りにきて、声をあげて泣きじゃくっていたそうだ。母は李青年のことを、「中国での十一年間の生活の中で、本当に心を許した人は李青年の他にはいない。彼は、私を日本人の女性だからということではなく、この満州の僻地で、幼い子供を連れて生活をしている一人の人間として、限らない愛の手を差し伸べてくれたのだと思う。

今でも李青年のことは、ほのぼのとした気持ちで思い出す」と言っていたが、年若い女性が、ただ夫について満州大陸の僻地にきて、だれも見知らぬ異郷の地で毎日を不安で過ごさなければならぬ環境のもとでは、李青年は本当に頼りになる現地人であったのだろう。

三 新京で迎えた終戦

私たち家族は、北鎮県から新京へ、そしてその後ハルビン、佳木斯と転勤して歩き、昭和二十年の春に、再び新京に戻ってきた。新京では、新京興亜胡同公務員住宅に落ち着いた。この住宅の庭は、ドロ柳の木に囲まれていて、テニスコートが一面とれるほどの広さがある、その庭に植えたトマト、キュウリ、ナス、トウモロコシなどがよく実った。戦時中ではあったが、新京ではまだ食糧品の配給も一応順調で、毎日の生活には不自由が無く、平穏な生活が続いていた。私も小学校一年生になって、市内の日本人小学校に通学していた。

しかし、勇ましく戦勝を報じていたラジオや新聞に

も、だんだんと敗色の様子が読みとれるようになってきた。「日本は、負けているらしい」とか、「ここにはもう、住めなくなる日が来るのではないか?」とのうわさが、どこからともなく伝わってきた。そんなことになったら、私たち日本人は一体どうなるのだらうと考えたが、皆目見当がつかないまま、ただ不安な苛立たしい日々を過ごすばかりであった。

その不安が、やはり現実のものとなってきた。八月九日、ソ連は日ソ中立条約を一方的に破って、突然国境を突破して北滿の地に攻め込んできた。全滿州に在留していた日本人が絶対の信頼を寄せていた、頼みの精銳関東軍は、主戦力が既に南方戦線に移っていたので、私たちを守ってくれるはずの軍隊は、木銃と竹で作られた剣を下げた戦力無き軍隊となまっていることも、薄々と分かってきた。

国境近くで生活している日本人は、次々とソ連軍の戦車にじゅうりんされて殺されているという話も伝わってきた。ソ連軍はいずれ近いうちに南下してきた、ここ新京も同じ運命をたどるに違いないとの判断

により、せめて女、子供だけでも、列車で逃げられるところまで南下させようということになって、急ぎよ広場に集合することになった。

当時、母は五人目の子供を宿していて臨月に近い体であったが、十一歳の一番上の兄と一緒に、三人の子供の手を引きながら、当座に必要な身の回りの物を少しばかり背負って、住み慣れた我が家を後にした。そのころ新京地区は、毎日毎日雨降りの日が続いていた。その日も篠突くような雨降りであったが、その中を、遙かな南嶺の集合地点まで夢中で歩いた。あの夜のことは終生忘れることができない。母はその後亡くなるまで、「八月になると吐き気がして、下腹が妙に張ってきて、お産をするような気持ちになる」と、よく言っていた。

南嶺からやっと乗った列車は、何が起こっているのか分からないが、普通の動きではなく、止まったり動いたりを繰り返していたが、新京を出てしばらくして、奉天との中間地点の四平街近くの高梁畑の中で、止まってしまった。状況は全く不明であり、乗ってい

る人たちが苛立ってきたが、どうにもならなかった。そんな状態になっていたとき、もしかしたらと案じていたことではあったが、母が急に産気づき、列車の中で赤ん坊を産み落とす事態を招いた。一緒に乗っていた人たちの手助けで、へその緒はどうか切って処置したが、消毒も何もあったものではなかった。私たちの乗っていた列車は無蓋貨車なので、生まれた赤ん坊は雨に濡れたり、夏の暑い日差しに照らされたりしていたので、柔肌は火膨れの状態になって腫れあがっていた。今になって思うに、赤ん坊もよく生き残ったものと、人間の生命の強さをつくづくと感じている。

四平街で、日本がこの戦争に無条件降伏したことを知らされた。皆で相談した結果、ひとまず新京のものと住宅街に戻るようになった。

四 敗戦から引揚げまで

敗戦を知らされた私たちは、「これから先はどうなるのか」「日本に帰れるのか」「いつ、どのようにして帰るのか」などと、皆で話し合っていたが、どうなるのか見当もつかず、具体的な話にはならなかった。だ

が、母は「子供たちと一緒に、どんなことをしてでも無事に日本に帰れるように頑張ろう！」と、自分に言い聞かせると共に、子供たちにも強く言っていた。そして更に、「その日が来るまでは、決して焦らずに、全体の流れに従って行動することが大切だよ」とも言っていた。私たちも、母の言う事をよく守ろうと決心した。

間もなく新京にもソ連軍が侵攻してきたが、うわさで流れていた様子は無く、予想に反してその行動は静かで、市民との間における悲惨なトラブルはほとんど無かった。

しかしそれもつかの間の平穏であって、そのうちに、青い眼をした体格のいいソ連兵が数人ずつグループを組んで、日本人の家に次から次へと押し入ってきて、手当たり次第にめぼしい物を強奪していった。彼らが一番欲しがった物は、腕時計のようであった。自分の腕には、既にどこかで奪ってきた時計を五個も六個もはめていながら、なおも「トケー！ トケー！」と、わめきながら探し回っていた。よほど珍しくて、

以前から欲しい、欲しいと思っていて、新京に侵攻したら、日本人からまず一番に取り上げようと考えていたのであろう。

こんなにめちゃくちゃな、軍規の乏しいソ連軍の兵士であったが、朝夕に実施する行進訓練だけは見事であった。行進と共に軍歌を歌っていた。だれが指揮しているのかは分からなかったが、それぞれ三部合唱、四部合唱になっていて、それがきれいなハーモニーを構成し、軍靴の音に合わせて街中を練り歩いていた。

しばらくたつと、ソ連軍はどこかに行ってしまう、次いで進駐してきたのは、蔣介石が率いる国民党軍であった。国民党軍の軍装は、統一されていて整っていた。予想された在留邦人とのトラブルもあまり聞かなかったが、敗戦後半年ぐらいたったところに入ってきた、八路軍といわれる共産党軍との間で、激しい市街戦が開始された。

新京の中心街の東西に陣取っての両軍の戦いは、多くの市民を巻き添えにし、昼夜を分かたず銃砲の撃ち合いをしていて、市民にも流れ弾が当たって多くの死

者が出た。新京での市街戦では八路軍が勝利を収め、国民党軍は敗退して、新京は八路軍の軍政下におかれ、平穩を取り戻した。八路軍の軍規は非常に厳正で、処罰も厳しく、略奪、盗みなどをすれば、即刻銃殺になるとのことだった。

そのような情勢になって、私たちが在留邦人も多少落ち着きを取り戻したが、日常生活で困ったことは、統治する軍隊が入れ替わる度に、流通する通貨が変わることであった。ソ連軍は、赤い大きな形をした軍票を使い、国民党軍が使用していたのはアメリカのドル紙幣に似たような紙幣で、八路軍のものは日本紙幣によく似たものであった。これらの通貨は、その軍隊が撤退すれば、たちまちのうちに価値が無くなり、ただの紙切れになってしまうので、大変に神経をとがらせることの一つであった。統治している軍隊がいつ入れ替わるのかという情報については、細心の注意を払っていた。撤退するらしいという情報が入ると、急いで手持ちの紙幣を切り切ってしまう必要があった。こんなことは、国際法上でどんな取り決めになっているのか

は知る由もなかったが、そんな流通貨幣の事情のなかで、ただ一つ不思議なことには、敗戦国となった日本の旧紙幣は、どこでも、いつまでも使うことができた。

新京に引き返して以前の公務員住宅に戻り、生活を再開したが、ソ連兵の略奪行為、国共内戦による市街戦、そして流通貨幣のことなど、いろいろな問題があった。何とかそれらの事態を克服してどうにか落ち着きを取り戻した生活を過ごしていたが、安心した日々ではなく、いつ何が起きるかという不安を抱えた毎日であった。だが、不安だからといって、ここから抜け出すことはならず、ただ、その日その日を惰性で生きていくだけだった。特に、一度撤退したソ連軍が再び進駐してきたので、何かするのではないかという一抹の不安が大きかった。

だが、この不安な気持ち、ある日現実のものとなってしまう。ソ連軍の憲兵である「ゲーペーウー」が、連発小銃のマンドリンを構えながら、通訳を連れて、土足のままで我が家の中に踏み込んできた

のである。かねがね、こんなこともあろうかとは覚悟していたが、現実のこととなると、どう対処したらよいかと途方に暮れてしまった。家族一同、おるおるするばかりであった。通訳が「主人はいるか!」とどなるので、父は顔を出した。すると通訳は、「あなたは、〇〇省の高橋さんですね。ちょっと聞きたいことがあるから一緒に来て下さい」と、馬鹿丁寧な言葉を掛けてきた。母と私たち子供が、事の成り行きにうろたえていると、通訳は母に向かって、「奥さん、何でもないから心配はいりませんよ。一、三日で帰れますから、当座の着替えと洗面具だけを持たせて下さい」と言った。こんなやり取りをしているうちに、父はマンドリン銃を突き付けられながら、連れ去られてしまった。家族一同は状況が飲み込まずに、しばらくは放心状態になっていた。我が家だけではなく、隣近所の住宅でも同じような状況であった。彼らは正確なリストを持っていて、満州国の公務員だった者を次々に捕らえていたのだった。

私は、父について町外れまで行った。そこには、公

務員住宅で捕まった五、六人の人がいたが、皆顔見知りの人たちだった。捕まった人が揃うまでの間に、父がちょうどそこに来た饅頭売りから饅頭を買ってくれた。私は父の顔をちらちらと見ながら、饅頭を食べるのに夢中になっていたが、その饅頭が甘くてうまかったことが、今でもはっきりと思い出される。父は、そばで銃を突き付けていたソ連兵にも饅頭をすすめていたが、彼らは断っていた。

やがてトラックは、父たちを乗せて走り出した。どこに連れて行かれるのか分からないが、私は「お父さん！ お父さん！ さようなら！」と、手を振ってトラックのあとを追い掛けた。二、三日で帰れるなどと言っていたが、実際はそんなになまやさしいものではなかった。父たちは、そのままシベリアのラーゲルをあちらこちらとたらい回しにされて、容赦ない激しい労働に従事していた。疲労と栄養失調でやせ衰えてひよろひよろになって、日本にたどり着いた父と再会できたのは、四年半後であった。

この父たちの逮捕事件を境にして、公務員住宅街の

状況は一変した。男性は皆いなくなり、残ったのは女、子供ばかりであった。このような逆境での日常生活を続けるには、住宅街で生活している女性たちは全く無知で、生活能力というものは無に等しかった。いきなり荒海の中に放り出されたようなもので、何事につけても戸惑うばかりで、いろいろとへまばかりをやっていた。そうなると、満人や中国人にも見くびられてしまい、家財道具などを、「もうこんな物は値打ちがない」などと言われて、ただ同様にだまし取られたりして、見る見るうちに家の中には何も無くなってしまう。それからの生活は悲惨極まりないので、まず一番最初に食べるものが無くなり、次いで栄養失調になって体力が衰えているところに、各種の伝染病がまん延して、幼い子供からどんどんと死んでいった。

母は、「生後四十日になった赤ん坊を抱え、まだ幼かった四人の子供たちを連れてのこれから先の生活を考えると、このままこの地で野垂れ死にするしかないのではと、だんだんと深刻に考え込むことが多くなっ

てきた。またそのように考えるのとは反対に、時にはだれかからほったたを叩かれたような気持ちになり、自分の考えの愚かさにはっと気付き、がく然となることもあった。そうだ、野垂れ死などと甘ったれたことを考えている場合ではない。子供たちを日本に連れて帰り、日本再建のために役立つのがせめてもの私の役目だ。それが、今まで生かされてきた私に与えられた使命だと思った。とことん努力をして、子供たちを一人でも多く日本に連れて帰ろうと心に誓ったものだった。それには、この冬を何とかして乗り越えよう。春まで持ちこたえれば、後は何とかなるだろうと決心し、この思いを支えにして頑張って生き抜いたのだ」と、述懐していた。

新京も、秋の終わりに近づいてくると次第に寒気が強くなり、生活はますます悲惨なものになってきた。暖をとるにも燃料が無いのだ。生きるためには何でもしなければならぬと決心して、燃料集めをすることにした。空き家があれば二、三人で組んで押し入り、天井板や床板をはがして持って帰り、燃料とした。

また、食事は高粱のかゆと、わずかな野菜、それも一日に二食しか食べられずに、抵抗力のない幼児は、栄養失調でばたばたと死んでいった。水道も電気もとつくの昔に止まっていたから、風呂には長い間入ったこともなかったので、当然のことながら下着などの洗濯もできず、虱が髪の毛や下着の隅々にまでわいていた。不潔さがもつて、発疹チフスや赤痢などいろいろな病気がはやって、薬も無いのでどうすることもできなかった。

毎日空きっ腹を抱え、虱にせめられていて、満人の子供に石を投げられても何も抵抗できない私たちは、哀れそのものであった。

そんな四開の状況の中で、一人の中年の女性が、元気な子供たちを集めては勉強を見たり、遊戯などをしてくれた。小学校の先生だということであったが、あの厳しい環境の中で他人の子供たちを励ましてくれたことは、今思い出しても胸が熱くなってくる。

ある日のこと、町中で異様な光景に出合った。それは、男か女か分からないほどに髪の毛がぼうぼうと伸

び放題になっていて、この寒空に、とてもまともとはいえない麻袋の切れ端のようなものを、衣服代わりに体に巻き付けているだけの風体をした、二百人ぐらいの団だった。彼らは、たった今地獄の底からはい出してきたようなうつろな目をして、ふらふらとさまよう如く歩いていった。ちよつとさわつただけで倒れてしまいそうで、足を引きずりながら夢遊病者のように近づいてくるのであった。その集団は、奥地からやつとあつた。この様子を見て、私たちは自然に涙がこぼれ落ちてきた。「ああ、情けないことよ、これが日本人の姿か！」と懨然となり、いたわりの言葉も出なかつた。この人たちは、老人や子供は途中の山野で見捨てるほかなかつたのであろう。集団の中には、老人や子供の姿は見受けられなかつた。

母の残したメモには、そのころのことが次のように記してあつた。「幼い子を抱えている私は、働きに出ることはできなかった。時計や写真機などのような、金目の物は全部略奪されてしまい、家に残っている物

にろくな品はなかつたが、とにかくにも現金を手に入れなければならなかつた。なんとか家に残っているがらくたを、道端に並べて売ることにした。道を通る中国人の中には、面白半分の手にとつて品定めをする人もいた。ときには、思い掛けなく高値で売れたものもあつたが、物によっては見向きもされない物もあり、その方が多かつた。高く売れたのは、大事にしていた西陣織の丸帯であつたが、実際はあてやかな西陣織のものではなくて、芯の木綿がねらいであつた。木綿の芯を靴の底皮にするというので、高値がついたのだった。毛皮や防寒具も高く売れた。そのほかちよつと意外だつたのは、子供がおもちゃにしていた満州国の勲章で、金が使つてあるといつて高く買つてくれた。もう一つ意外だつたのは、チェコ製のバラの根で作つたパイプで、ある満人が見て、ためつすがめつしていたが、気に入つたのであろうか高値で買つていった。雑誌の口絵を切り取つて綴り込んだ浮世絵の画集は、ソ連軍の将校が買つていった。哀れだつたのは、子供連れの男の人が、茶道具入れの白木の箱を、

『母さんのお骨を入れよう』と話しながら買っていたことであつた。

寒い冬の間、たくさんの人が病気や栄養失調で亡くなつた。思わぬ事故で亡くなつた人もいた」

楡シの若葉の 風薫る

窓に衣縫う 小娘が

針の手しばし 休めつつ

指折りてみぬ 幾日にて

娘々祭 きたるか

と、子供たちが歌っていた童謡をふと思い出した。

新京にも再び春がきた。我が家では、売れる物は全部売り尽くし、食べ物も残り少なくなつてきたが、母と私たちは、困苦欠乏の冬を必死の思いで乗り越すことができた。母は、こういうことも書いていた。「私に残された財産は、栄養失調でやせ衰えて、眼ばかりがぎよろぎよろした青白い子供たちだけである。何と少しでも無事に日本に連れて帰り、祖国再建のために役立つように、しっかりと育て上げなければならぬ」と心に誓っていた」と、母の覚悟を端的に表してい

た。

七月末ごろから、この住宅街でもぼつぼつ引揚げの話が出始めた。引き揚げる人が増えたためか、市内でも日本人の姿がだんだんと少なくなつてきた。八月半ば過ぎになると、引揚げの知らせが入ってきた。指示に従つて引揚げ準備が始まつたものの、もう我が家には何もかも無くなつていた。日本に持つて帰る荷物などは何もなかったが、それでも各人が自分の物や赤ん坊のおしめなどを分担して背負うことになつた。現金は一人あて千円までが許されていたが、我が家にはもう持つて帰れる現金も無かつた。以前から懇意にしていた父の友人がこの窮状を知つて、自分たちが持ち帰れる限度を超えたお金を、どうせ持つて帰れないのだからと、私たち一人一人に持たせてくれた。

いよいよ出発の日の朝、小学校五年生だった長兄と、三年生の次兄が、「お母さん！ 僕たちはここに残つて、お父さんが帰るのを待っている」と突然に言い出したので、母はびっくりして、兄たちを叱つていた。満州で生まれ、満州で育つた私たち子供にとつて

は、祖国日本といつても何も知らない他国であり、母とは違つて、日本に帰れるという喜びや感激はあまりなかった。それよりも、やはり大陸から離れることの方が、惜別の念があつた。

引揚者に乗せた無蓋の貨物列車は、新京から奉天へ、そして錦州へと進んでいった。懐かしい、幾多の思い出のある奉山線である。そのうちに、列車の目の前に北鎮県の古塔が、青空にくっきりと見えてきた。

母はその端麗な姿の双塔を凝視していたが、「昔と少しも変わらないね」とぼつりと言っていた。若かりし良き新婚時代のこと、李青年のこと、イギリス人神父のいた教会などの思い出が、走馬灯のようにどんとどんとまぶたに沸き出ていたのだろう。

五 大陸よ！ さらば

葫蘆島が最終の目的地であつたが、引揚者に乗せた貨物列車は、目的地まで走ってはくれなかつた。どこだったか、今になっては思い出すことができないが、奉天を過ぎてしばらく走つたところで止まつてしまい、我々引揚者は無理やりに降ろされて歩かされた。

野宿をしたり、馬小屋のようなところで雨露をしのいだりして、十日間ほど歩いて移動した。兄弟は皆が、それぞれ自分の分の荷物を背負つて歩いた。皆小さかつたので、そんなに大きな荷物ではなかつたが、私は荷物が重いとよく泣いたそうだ。私のすぐ下の妹は、生まれたばかりの妹を引揚げの間、ずっと背負っていたが、泣き言一つ言わなかつたので、長兄は私には情けないやつだと小言を言い、妹には偉いぞ、偉いぞと褒めていたのを覚えてゐる。私は、自分でも情けないなと思つたものだった。

やつと引揚船の発着する葫蘆島にたどり着いた。ここでは蚤、虱を駆除すると言われて、DDTという白い粉を頭のとっぺんからつま先まで、それこそ全身が真っ白になるまで振りかけられ、更にチフス、コレラ、赤痢などの予防注射を、一度に何本も打たれた。やつとの思いで、アメリカの上陸用舟艇リパティ一号に乗り込むことができた。

船内は汚らしくて狭苦しかったが、自分の席が決まつたときには、正直言つてほつとした。これで安心

して日本まで行くことができると思うと、今までの疲れがどっと出てきて、うとうとし始めた。船が出航すると、すぐに船酔いに悩まされた。博多港に近づいたが、博多に上陸してかまぼこ小屋の収容所で寝たときは、地面と床がゆらゆら揺れているような感じが長く続いていた。

引揚船では、悲しいことがずっと続いていた。体力の弱っていた子供が何人も死んでしまつて、毎日水葬が行われていた。ここまで何とか頑張つて生きてきたのに、どうしても少し頑張つてくれなかったのかと思つくと、涙が止まらなかつた。引揚者のすべての人が、声をあげて嘆き悲しんでいた。

船員さんが「船は、中国の領海を離れました。もうしばらくすると日本の領海に入ります。もう安心して」と、船内放送をしていた。それを聞いたとき、私は八年間の満州での生活が、この時をもって完全に終わったのだなあと思つた。船内の人たちは、口々に

「万歳！ 万歳！」と叫んで、感激の涙を流して、隣にいただれかれを構わずに抱き合つて小躍りしていた。

日本の緑濃き山々をはるかに眺めたときにも、大人たちは「万歳」を叫んだ。故郷へ思いを馳せていた母は、無事に博多港に上陸できたときは、夢を見ているような気持ちだったと、後々に語っていた。

以来五十五年の歳月が流れ去つたが、引き揚げてから今日まで、海外から着のみ着のまままで日本にたどり着いた者は、程度の差こそあれ、人には言えない苦勞と、悲しみと、そして周囲の心ない言動などに耐えて、自立再建の道を歩んで何とか生き抜いてきた。そして今日の、ささやかながら平和で安穩な日々を迎えたのだ。

父も母もすでに亡くなった。あの満州での過ぎし日々のことは、まさに往時茫茫たるものである。